

2024. 6. 26 オクラの種まきから世界が広がる

5月終わり、Y男はオクラの種をポットに蒔きました。

Y男は毎日丁寧に水をあげ、6月初旬になると芽が出てきました。

「やった！出てきたよ！」と出てきた芽を見て、Y男は大喜び！

そして、双葉が少し大きくなると、「指2個ぐらいの大きさだなー」と葉っぱに指をあてて、大きくなってきたことに喜びを感じていました。

しかし、よく見ると葉っぱが少し食べられていることに気がきます。

「あれ、葉っぱが少し食べられてるよ！」

「でも水をいっぱいあげれば大丈夫だね！」とその上からたっぷり水をあげるY男。

次の日、なんと葉っぱがなくなり、茎だけになっていました。

「先生！大変！葉っぱが全部食べられちゃった！」と焦った表情のY男。

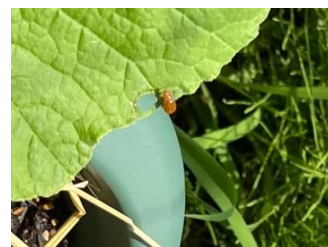
そこで、「どうしよう？」と教師が尋ねると、Y男は「そうだ！きっと葉っぱを食べたのはダンゴムシかミミズだよ！カエルかもしれない！下に置いてあるから食べられたんじゃないかな？これをもっと上にしたい！」と言ってきます。

そこで教師は、「じゃあ、こんなのあるよ！」と大きいコンテナを持ってきました。すると、「これじゃあ、カエルがジャンプしたら届いちゃうかも。もうちょっと高くできないかな？」と高さを何回も確認しながらさらに自らたらいを持ってきて高くするY男。ポットの位置が高くなると、「これで大丈夫でしょ！」とY男は満足気です。

次の日、朝登園してくると、Y男は「オクラ大丈夫？」と様子を見に来ます。

すると、昨日以上食べられた痕跡はありません。「よかったー」とY男。「でも、とんぼとかが飛んできて食べたらどうしよう？」とY男の心配は尽きません。すると、や他の男児らから、「案山子をつけるといいよね！」と案山子のポーズをとっています。「案山子かー」とY男。

好きな遊びの時、Y男がおひさまテラスで「先生、葉っぱに何かいる！」と呼びに来ました。一緒に見てみると、キュウリの葉っぱにオレンジの虫がついています。そして、きゅうりの葉っぱを丸くくりぬいて食べていました。すると、Y男は「あっ、オクラの葉っぱを食べたのもこれか！」と言います。捕まえようとする、飛んで行ってしまいました。「ほんとにあれがオクラの葉っぱ食べたのかなー？」と言いながら、その場を去っていくY男。



次の日も Y 男は朝からオクラを確認しに行きます。「よかった！今日も無事！」と嬉しそう。「やっぱりこの高さがいいかな？ダンゴムシとか食べれないしね！」と Y 男。「念のため、昨日バッタがいたからもうちょっと高くしとこ」とバケツを置く Y 男。

S 子のかぼちゃの葉っぱのところで、「先生！なんかオレンジの虫がいるよ！」とつぶやきます。昨日、Y 男がきゅうりの葉っぱで見つけたものです。そのことを Y 男に伝え、「せんせい、あの虫、何の虫か調べてみよう！」と言いに来ます。そこで、降園前のひとときの時にみんなで調べてみることにしました。検索サイトで「オレンジ、虫、きゅうりの葉っぱ、食べる」と検索をすると、Y 男らが見つけた虫が出てきました。

「あれはウリハムシって言うんだ！」

そこでウリハムシについて、動画で調べてみることにしました。ウリハムシはキュウリ、メロン、スイカの葉っぱをどんどん食べる。穴をあけるように食べることなどを子供たちは知ります。そして、駆除の方法も紹介されていました。一つは農薬をまくこと。でもそれはアブラムシや他の虫も駆除するという。「薬をまくということは、アブラムシもやつけてしまう、そうするとテントウムシとかも来なくなるよね」と子供たち。その他には、ウリハムシを見つけたら手で追い払うこと、そしてキラキラ光るものが苦手なので、光るマルチシートを敷くことなどが紹介されていました。

次の日、朝から水やりをしながら、「あ！ウリハムシ発見！」と子供たち。S 子は「私このキラキラを私のメロンのところにつけておこう」と銀色のテープを網につけます。

M 男は「ほら、そこにもいる！」とジャガイモの葉っぱでウリハムシを見つけます。K 男は「おい！あっちいけ！」と手で追い払いました。その横で R 男が「ウリハムシ捕まえた！虫かごにいれよう！」とウリハムシを虫かごに入れます。そこから R 男と K 男、S 子らでウリハムシ集めが始まりました。（その 2 に続く）

オクラの種まきから世界が広がる

～その 2 出会い、関わり、価値観が変わっていく～

「確か、葉っぱの後ろにいるって言ってたな…」と R 男。キュウリの葉っぱの裏を探すとウリハムシを発見。M 男は「飛ぶから、捕まえる機械を持ってきたよ！」と紙コップを二つつけて、捕まえるためのものを保育室から持ってきます。ウリハムシが入っている虫かごに K 男は「スイカの葉っぱをちょっと入れておこうかな」と自分のスイカの葉っぱを少しちぎると虫かごにいれます。



虫かごにウリハムシが少しずつ集まってきます。すると、K 男が「先生、ウリハムシが交尾してるよ！結婚してるんだ！」と嬉しそうです。「赤ちゃんを産んでもっと増えないかな？」と K 男。朝は「あっちいけ」と言っていたものが、気付いたら愛おしいものへと変わってきているのでしょうか。



N 子も「捕まえたよ！」とウリハムシを持ってきます。ウリハムシは 10 匹以上になっています。



K 男らはみんなの時間でウリハムシを集めたことを紹介した。「ウリハムシに餌をあげたんだ！餌をあげないと死んじゃうじゃん」とみんなの前で紹介する K 男。「ウリハムシを見つけたら、僕に教えてね！」と最後に K 男。

教師はみんなの時間のあと、月刊絵本の付録についていた「さんぽ図鑑」をみんなに分けました。すると、さんぽ図鑑に「ウリハムシ」が載っていました。「先生！ウリハムシがのってるよ！すごい！」と R 子。教師もびっくり！K 男も「ウリハムシ、見つけたからここにシール貼っておこう！」と見つけた証拠のシールを嬉しそうに貼っていました。



K 男は昼からさんぽ図鑑をもって、園庭を探検し始めた。すると、「先生！これはテントウムシかな？」と葉っぱについた虫を持ってきます。「とりあえず虫かごにいれておこう」と K 男。おそらくカメムシの卵。でもまた新たな探究が始まるのでしょうか。T 男は「この葉っぱもいっぱい食べられてる！」とサンゴ樹のはっぱを見ていました。「これもウリハムシなんかな？」と新たな問いも生まれていました。



最初は害虫としてのウリハムシでした。それが、少しずつ子供たちの中で見方が変容していきます。何を中心に考えるかで子供たちの見方はどんどん変わっていくような感じもしました。オクラ中心から、ウリハムシ中心へ。でもそれは同時に、いろいろな出会いの中で、子供たちなりに世界をひらいていっているようにも思えます。その世界はいろいろな分野、専門性がつながっているようにも感じます。

もちろんオクラの世話も継続中で、ポットから植え替えて、本葉も出て、すくすく生長しています。スイカもキュウリも実ができ、ウリハムシが食べても気にならないぐらい葉が生い茂るようになってきました。そのような中でも、ウリハムシは今も飛び続け、集める子供たち。

テントウムシは絵本に出てきたり、可愛さから幼児らにとっては害虫的な要素はあまりありません。でもテントウムシも野菜を育てている方からしたら害虫になることもあるのでしょうか。ウリハムシ中心の絵本は多分ないけど、さんぽ図鑑に載っていた奇跡。しかもテントウムシと同じ並びにです。

このオクラからのストーリーがなければウリハムシに子供たちも教師も見向きもしなかったのかもしれませんが。野菜の葉っぱについているとパツパと手で払っていたでしょう。そう思うと、教師自身も出会いが繋がっていくことがとても面白く、またその時期、タイミングを見逃してはいけない重責すら感じます。ウリハムシを捕まえた子が「黄色い汁をだした！」と言ってきました。それを見て、K 男は「テントウムシと一緒にだ！」と言います。そこでテントウムシの絵本をみんなで見ました。次の日、いろいろな子が「僕も黄色のがついたよ！」と言っています。個の気付きをみんなの気付きへ。そこから興味・関心が広がり、深まり、そこからまた新たな虫や植物の世界へ。そのような幼児教育の面白さを感じさせてくれたウリハムシでした。